小原國芳からペスタロッチへ　その2

——為すことによって学ぶ——

"FROM KUNIYOSHI OBARA TO JOHANN HEINRICH PESTALOZZI" No. 2
—— LEARNING BY DOING ——

坪　田　庸　子
Nobuko Tsubota

目次

はじめに
Ⅰ．小原國芳の場合
　1，その人なり
　2．小原の夢（vision）
　3．人の教育　　以上紀要20号
Ⅱ．ペスタロッチの場合
　1．その人なり
　2．ペスタロッチの夢
　3．人間性の教育
Ⅲ．ペスタロッチと小原の類似点
　1．妻たち（アンナと信）
　2．愛の教育（全人教育）
Ⅳ．ペスタロッチの教育　　以下次号
　1．母の教育
　2．宗教教育
おわりに

昭和3年（1928年）2月，岡山県女教員大会のペスタロッチ祭（ペスタロッチ死後，100年祭）において，小原は『ペスタロッチを慕いて』と題して講演を行い，それを書物（玉川大学出版部）に著している。小原は日本のペスタロッチといわれるほどにペスロッチを慕い，新教育の開拓，実践に努めた人である。

今回私はこの書物に基づきながら，「ペスタロッチの人となり」，「ペスタロッチの教育の原点」，「小原との類似点」等を見て行きたいと思う。

小原はこの本の中で次のようにいっている。「先生のあの波瀾万丈，曲折多かった生活は成功だったのか失敗だったのか，神様にしか分らないあの生活は無論批判のしょうもないですが，ただ単に事実を伝えることすら困難なことです。いわんやその思想に至りましては容易なことでないと思います。先生の文章は実に難渋で，謎みたようですし，時に論理的に矛盾すらあるし，含蓄の多い詩みたようなあの文章は到底私等に分るべくもありませぬ(1)。」と。一方，小原自身の文章は簡潔で読みやすいが，一般的には論理的に矛盾が多いといわれている。小原はこの矛盾をも「反対の合一」であるというのかもしれない。さらに，「実に，宗教的体験のないものは到底，先生の教育は了解できまいと思います(2)。」といっているが，これは小原がクリスチャンであるから，ペスタロッチの心底を理解できたのであろうと思うが，私はペスタロッチも小原もキリストに倣って，幼な子を愛し，キリストの道を生きた人であると思う。

Ⅱ．ペスタロッチ（1746～1827）の場合

1．その人となり

ペスタロッチは1746年1月12日外科医ヨハン・バプテスト・ペスタロッチ（Johann Baptist Pestalozzi, 1718—1751）の子として生れたが，その父は彼が5歳のときに他界，あとには信仰厚い母スザンナ・ペスタロッチ（Susanna Pestalozzi, 1720—1796）と一つ年上の兄と生まれたばかりの妹とが遺された。この4人の家族は，父が亡くなる数ケ月前に傭われたバベリというお手伝いさんによって，父亡き後41年の長い間大いに助けられ，生活を維持することができたのである。

幼いペスタロッチは，貧しさの中にあっても信仰厚い母とバベリとの愛の献身と犠牲との雰囲気の中ですごし，そのことによって，彼の心の中には，自己犠牲の精神や敬虔な信仰が芽生えたのである。彼は体が弱く感情的であり，父親が早く亡くなったこともあってか，性格は女性的であったようだが，そういうペスタロッチに男性的な影響や感化を与えた人として祖父アンドリアス・ペスタロッチ（Andreas Pestalozzi, 1611—1769）がいる。この祖父はチューリッヒの近村ヘンクの牧師であり，村の学校監督も兼ねていて，村の家々の訪問を日課とし，それぞれの家に適切な助言を与えて歩いたとい

う。ペスタロッチは毎年夏になると祖父と一緒にこの家庭訪問をして歩き，村民の生活ぶりを目の当たりにすることによって村民の悲惨さが理解できるようになり，一方では祖父の宗教的で真摯な態度に魅せられるようになったのである。ペスタロッチはこの時から自分も牧師になって貧民を救済しなければならないと決心し，チューリヒ大学に入学するのであるが，それ以前の学歴はどのようなものなのであろうか。

まず，ドイツ語で教える小学校に何年か通学し，1754年春にはラテン語学校の下級に入り，1757年にはグロスミュンスターにあったラテン語学校の上級に転学し，1761年から1763年までコレギウム・フマニタティス（文科高等学院）に在学し，最後に1765年の秋までコレギウム・カロリヌムで言語学と哲学を研究した。

コレギウム・カロリヌムでのペスタロッチの恩師としては，ギリシャ語およびヘブライ語学者ブライティンガー（Breitinger）がおり，彼からは相当に深い古典語の造詣を得たばかりでなく，ギリシャ精神・キリスト教精神に触れ，さらに人道主義的傾向もこの人から影響を受けたものと思われる。もう一人の恩師歴史および政治学者ボドマー（Bodmer）は，「当時の社会状態をギリシャやローマの盛時と比較して大いに堕落しているものと見，祖国をかっての盛時に帰すために，正義と自由と生活の単純化と国民一般の幸福のために献身する態度を市民生活の上に再建するよう，青年とともに奮闘しなければならぬと考えた[3]。」ペスタロッチは牧師になろうと勉強したにもかかわらず，説教の能力に欠けているために牧師になることを断念，ボドマーの感化をうけて，政治家になろうとしたが，これもままならず途中で挫折。今度は農業改革者になって貧民階級の人々の救済にあたろうと思った。彼の仕事は三転四転していくのである。

ペスタロッチが病弱のため学業を退き（1765年）農業で身をたてようとベルン郊外キルヒベルクの農業改革者チッフェリのもとで農業実習を始めた頃，アンナ・シュルテス（Anna Schultes 1738—1815）と婚約。婚約成立直後（1767年）から，1769年の秋の結婚までの2年間にペスタロッチからアンナに約300通，アンナからペスタロッチへ約200通の手紙の交換がなされたのである。これらは単なる恋文だけではなく，ペスタロッチの正直な自己反省があり，生活設計，人生設計などの意見交換などであった。

美貌の持ち主で9歳年上のアンナとの出会い。ペスタロッチといえば，「その顔は猿に似て，その体軀も不恰好な型の人であった。その健康はすでに学問に対するあまりに無理な努力によって破られていた。そればかりか，彼は風采には全く無頓着で，正式の服装は自分ではできないといっても言いすぎではないほどの人，何事にも無器用であり，その有名な無関心は時々服装の一部分たとえばネクタイを忘れて平気であった。一言にしていえば彼は女性をひきつけるような力はまずもちあわせていなかった[4]。」という風貌であった。しかし，アンナは「あなたにはあの大きな黒い瞳があって，あなたの心の善良さと心の宏大さとをすべて知らしています。もし自然がこの双眸を授けなかったら，あなたは或いは自然は殆んど何もして呉れなかった，と云ってもよかったかも知れません[5]。」と，ペスタロッチを子どもの頃からよく知っていたためもあろうが，ペスタロッチの秘められた力，魂の強さを鋭く見抜いていたのである。アンナのその観察力，洞察力にはすばらしいものがある。ペスタロッチ自身は自分のことを「私の欠点の中で最も重大だと思われるのは，無分別と不注意と，自分に関係ある事情にいつかは起る不測の変化に当って冷静さを欠く，ということです。——略——私はもっと色んな欠点をもっています。この欠点は，理性の判断にしばしば従わない感情（感じ易い性格）に由来するものです。——略——私は多くの善は本当に愛し過ぎるくらい愛しています。祖国の不幸や，友人の不幸がある場合，私には何の責任がなくとも私自身不幸な気持になるのです。そうしそうなることは，賢明なことでもなければ，義務でもありません。私たちは，私たちの力では阻止することのできないあらゆる事件に際会した場合，神を認識し，静かに沈黙すべきであり，いかなることが起るとしても，それが一番いいことだと信ずべきです。わが愛する友よ，私はこの点では，さらに弱い人間です。そしてこの弱さは同時に，あなたによく注意していただかねばならないのです[6]。」と自己反省とともに自分の欠点をよく理解し注意してほしいとアンナに頼んでいる。

ペスタロッチとアンナは共通の友であるブランチュリ（メナルク）[7]の死を通して二人がともに悲しみを乗り越えて生きなければならないことを確かめ合った。1769年結婚，1770年一子ヤコブ（Jakob）が生まれた。

1771年レッテン（Letten）のノイホーフ（Neuhof）に移住して農場を経営したが，1775年負債を残して失敗してしまう。しかし，ペスタロッチはこの不遇の中にあっても次の夢を実現しようと試みる。子どもの頃から抱き続けてきた夢，貧民の子どもたちへの教育を，と学校を作る決心をしたのである。子どもを耕作に従事させて自分たちの糧を得させ，知的教養を高めようとするものである。ヤコブの成長を通してペスタロッチは教育に情熱を注いだのである。

ノイホーフの新計画は成功したが，相変らず経営は火の車であった。このような時に生涯の友イゼリンに会

う。イゼリン[8]はペスタロッチの大恩人である。1778年イゼリンの編集している『エフェメリデン誌』に「人道の友に訴える書」と題して貧民教育へのアピールをする。この訴えは大きな反響を呼び起し，寄付金が集まり，経営もようやく軌道に乗ったかのようであるが，1780年アンナやイゼリンの協力を得て，人間の力で可能なかぎりの努力をしたにもかかわらず，この学校もまた経営難のため閉鎖のやむなきに至ったのである。（1780）

このようなどん底の時にペスタロッチはイゼリンに勧められて著作に励むことになる。『隠者の夕暮』（1780）『リーンハルトとゲルトルート』（1781）そして次の大作『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』(1801)まで実に教えられるだけで65冊[9]にものぼる著書がある。この『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』が書かれるまでの間には，約30年近くのノイホーフの生活を終えてシュタンツ孤児院（1798—1799）での教育活動がある。長い間夢みていた貧民教育，50名の孤児たちを集めて子どもたちへの愛で身も心も満たされて，子どもたちと一体になってのシュタンツでの生活は成功するかに見えたが，フランス軍が建物を病院にすることに決めたために解散させられてしまう。このシュタンツでの生活は異常な緊張と努力，冷笑と迫害の中にあって，学校経営には余裕があったものの，ペスタロッチは健康を害してしまった。

「私は，一人の家政婦[10]を除いては全くの一人で，子供達の教育や家事の世話を見る助手さえ連れずに，私の子供達の中に入って行き，一人で孤児院を開いた。私はそれを一人でしょうと思った。私の目的を果そうと思うならば，そうするより外に方法はなかったのである。神のしろしめすこの大地の上に，子供の教育と指導とについて，私と考えを同じくするような人は一人も居らなかった。また，それをなし得る人も，私の知る限りでは，その当時は一人も居らなかった。私が提携することのできる人々の中の大部分は，学識，教養が高ければ高い程，私を理解する度合は低く，私が行動の規準にしようと努めていた私の立脚点を理論的にすら理解しかねるような人々であった[11]。」この理解されない思想とは「人為的方法を用いずに，只，子供達を取り巻く自然と子供達の日々の要求，及び，彼等の絶えず生き生きとして動いている活動そのものを子供達の陶冶手段として利用しようとする思想[12]」である。さらにシュタンツでの生活ぶりを次のようにいっている。「どのようにして切り抜けたか，私は知りもせず，また了解することも出来ますまい。私は苦難と共に戯れ，私の前に恰も山の如くにそそり立つ困難に抗し，団体的に不可能に見えるものには，意志の力を以て臨みました。いわば，眼前に立つ次の瞬間をば，顧みることなく，現在の瞬間に，恰もそれのみが存在するかの如く，また生と死がそれに依存するが如く，専念するところの意志の力を以て[13]。」

ペスタロッチはグルニゲル温泉での1ケ月の休養後，1799年7月に小学校教諭を任命され1800年5月からブルグドルフ[14]の小学校で働くことになった。ここでは教授方法の研究に専心することができ，1801年にはブルクドルフ城内に理想的な学校を，学校と家庭とはその趣きを異にするものであってはならないという理想で創設した。ヘルマン・クルージー（1775—1844）等良き協力者に恵まれたが，一子セコブの死（1801）という悲劇に会う。しかしこの悲しみを越え，職員の一致を得て全力をあげて経営にあたり，ここではしばらくの間，順調に運営がなされていたが，またまた政変に遭い，ミュンヘンブックゼーの古い修道院跡への引越し（1805）を余儀なくされ経営難に陥る。この時フェレンブルグ[15]との提携が行われるが，まもなく二人の間に不和が生じ，結局1805年7月6日イヴェルドン(Yverdon)[16]へさらに引越しということになってしまった。

ペスタロッチの最後の事業の場であるイヴェルドンでの生活は1825年まで続いた。イヴェルドンの20年間はペスタロッチの名声と信望が高まり，彼の生涯での最高の時代であったが，だからといって学校が順調に運営されたわけではなく，規模が大きくなりすぎて，内容がペスタロッチの考えていたものとは遠くかけ離れたものとなってしまったのである。彼はあくまでも家庭的な親と子との関係にある教育を望んだのであるから，子どもとの関係はうまくいったのであるが，同僚たちの仲たがいがペスタロッチを今までにない苦境に陥れようとしてしまったのである。それでもなお，『白鳥の歌』（1825）を書き、神への感謝を忘れずにいる。『白鳥の歌』以前の1811年元旦の講演の一部を紹介しよう。

「——神よ，あなたはごく少数の人に見られるように，私を繞る周囲の人々と共に私を祝福し給うた。あなたは奇蹟によって私の周囲の人々の力を団結せしめ給うた。そして，その人々の力は，私が自らの生涯の努力のために必要とする力を実際にもっていたかのように，その私の生涯のせっかちな努力において私を救い給い，私の弱さにもかかわらず，私を立上らしめ給うたのである。あなたは私に私よりも優れた友を与え給い，しかも彼らは，彼等の前では，子供のように弱い私を父とさえ呼んでくれるのである[17]。」

1815年，46年連れ添った妻アンナが亡くなり，悲しみは深かった。さらにペスタロッチはイヴェルドンでの良き協力者を失い，イヴェルドンの実権はシュミット[18]に

牛耳られ，1824年ペスタロッチはまたもや無一物となって，著作に専念したが，1825年にはシュミットと当時残っていた4人の子供とともに思い出のノイホーフに戻らなければならなくなったのである。

2. ペスタロッチの夢

小原が300名位の寺子屋を夢見て始めた玉川学園は小原の計画力，実行力，経営手腕，そして協力者に恵まれて，今や幼稚園から大学院までの総合学園となっているが，一方のペスタロッチの夢は実現したかと思うと破れるという事態をくり返した。そのペスタロッチの夢はいったいどのようなものであったのだろうか。

ルソー[19]がその著書『エミール』で描いた夢をペスタロッチは愛と献身で実行し，実施してその教育の基礎を築いたのであるが，ペスタロッチは自分の夢について『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』の中で，反省をかねて書いている「思えば，長いことでした。あの青年時代から，私の胸は，まるで激しい奔流の如く，ただ一筋に，実にただ一筋に，私の周囲の民衆が溺れ込んでいる惨めさの原因を塞ぎ止めようという目的に向って，波立っていたのです。私が現在携わっている仕事を始めてから，もう30年以上になりましょう。イゼリンのエフェメリデンをお読みになれば，あの当時，私が実現したいと努力した同じような希望を，今も，なお持ち続けていることがお分り戴けるでしょう[20]。」その希望とは，1776年1月の『エフェメリデン誌』に「人道の友に訴える書」という文を書いている。すなわち，「人道の友人また恩人達に訴えて，田舎の貧児等に教育と仕事とを授けるための事業に助力を請う。

私は人道の友人であり，恩人である人々に訴えて，もう私一人では支えることの出来ない事業に助力を求める

私は長い間，立派な状況のもとで，もし充分の資金があって一つの制度を造り，それによって生活を保証するに止らず同時に或る初等教育を施すことが出来るならば，幼い子供達は過度の労働をしないでも充分自分達の生活費だけは稼ぐことが出来ようと考えていた。この方面で何らかの実験をすることは人道にとって最も高尚なことだろうと私は考える。

――中略――

私の願いと言うのはその人々が毎年小額の金を向う6ケ年間私に前借させて呉れることである。10年目からはその金は私の訓練した労働者達の賃金から年賦で返償する。

私はもしこの助力を得ることが出来るなら，他の一切の職業を捨てて，私の全生涯と全精力とを貧しい孤独な子供達の教育に捧げることを誓う。幾多の子供達が今回の財政的助力によって救われることを私は誓う。

――中略――

人道の友人よ。私の軽率故に自分でなした誤謬と損害との多いにも拘らず，諸君は私を信用して，計画を助けて下さるだろう。この計画は初まりには危険をもって入ったのであるが，過去の過ちによって私は多くの事を学んでいるから，めでたい結果になるだろうと思う[21]。」この訴えは貧民教育の必要性を説き，目的を述べ，従来の体験の報告をしているが，これが大きな反響を呼び，寄付金が集まったことは前述の通りである。この際の訴えでは教育は与えるものではなくて，自らがその中に持っているものを発見し育てるべきものであるというのである。しかし順調に行くかに見えたこの事業は失敗に終った。この時のことをペスタロッチは，「しかし，私は若いでした。私は自分の夢の理想の必要条件も知らず，それへの準備に必要な注意事項も，また実現するのに，なくてはならないいろいろな力をも知りませんでした。私の夢の理想は，農業，工業，商業を含んでいたのです。私はこれらの三つの何れについても，私の計画の本質に対する，或る高い，そして，私には確実と思われる分別を持ち合わせていました。この点については，いろいろ世の中の経験を経た現在でも，あの当時，私が持っていた私の計画についての見解から，そう離れているとは思いません[22]。」

玖村敏雄[23]によると「ペスタロッチがしばしば『夢』と呼んだところの彼の意図は直観に浮び出た真理の意味である。彼はいったん思い立つと何事でも冒険的に企て，いかほど他人から嘲笑されても敢然としてその事に当り，明らかに失敗するまでは美しい夢想を破ることができなかった。いな現実に失敗しても思想的に必要だと確信したら，しぶとくそれを固執し，夢はさらに夢を生むことさえあった[24]。」ということであり，又，稲村富次郎[25]は「ペスタロッチもルソーも美しい自然に囲まれたスイスに育ったためか，人間自然の本性を重んじこれを教育の基礎とした。――両者の思想は近似しながら，その人間的性格には相違があった。ルソーはもともと「感受性の強い心臓」を両親からの唯一の遺産として生まれ，終世夢を追う幻想の人であった。ペスタロッチも終世夢を描き，夢に憧れた人であった点に変わりないが，ルソーにおいては，夢や幻想は仮空のものであり，これに浸るだけで満足したが，ペスタロッチは夢を単なる夢に終わらせずに，実行せずにはやまぬ意欲の持主であった[26]。」といっている。

ペスタロッチの夢は50人位の貧しい子供たちを集めて貧民学校を開いて，子供たちと共に土地を耕やし，冬は綿や糸を紡いで学校経営の資金を捻出することに努める

ことである。

子供たちがその子の存在において平等であるように教育もまたすべての子供たちに平等に施されなければならない。

3. 人間性の教育

小原は前述の『ペスタロッチを慕いて』の中で次のように述べている。「人間救済は先生の畢生の大目的であった。理論でなく実行，著作よりも努力が先生の生命である。自然その思想も無味乾燥な概念の集積ではなくて，人間と密接な，人間に即した，人格から溢れ出た体験が生み出したものである。読書人でなかった先生のことである。天才的に創造力の豊かな人であったので，先生独特の理想である。理論から生れて来た教育論でなく，実際から生れた，人間救済の一念から迸り出た教育論である[27]。」

ペスタロッチの教育の本質は，『スイス週報』や『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』の中に見出すことができる。例えば『スイス週報』には，「生活すること，彼の地位において幸福にあること，及び彼の仲間において有益になること，これが子供を教育しあげることの目的である。

それ故に方法と道とを注意深く用いて，各々の子供がその境遇において自然的に容易に能力や，心術や，判断や，愛着に導かれ，是等によって子供が彼の地位において幸福に，彼の境遇において有益なる社会の一員となること，これがすべての善き教育の基礎である[28]。」

さらに『スイス週報』の26には，人間の欲求は肉体的，感覚的なものであるからまずこれを満たすことが基本であるとする。

「人間の最初の欲求は肉体的であり感覚的である。而して此の感覚的及び肉体的欲求の満足は人間の子供が地上における彼の存在において最初の教化印象である。即ちそれは彼の教育の基礎であって，彼の諸力や資質の最初の発達はその上に基礎を置くのである。

地上の如何なる生物よりも一層依存的であり無援であって，人間の子供は彼の母親の胸において彼の乳母の膝において愛と感謝との不明なる感じの中に道徳の最初の印象を感ずる。それは憐れなる人間においては殆んど常に彼の弱さの感じと彼の継続的なる欲求に保たれる[29]。」

子供たちが彼らの肉体的・感覚的な欲求が満たされることによって生じる感謝の気持，これが愛の一段階というのであろうか。つぎに自分の欲求を満たすためには，自らが相手の人あるいは物に対して働きかけなければならないことに気づくのである。

「子供等を注意して此の単純なる道に放置し，労働と感謝とによって，各人がその境遇において必要とする道徳，習慣及び能力を彼等に発展せしめるようにつとめることである。[30]」

「一人一人の子供の個人的境遇にしっかりと注意することが第一の本質的な教育の規則の一つである[31]。」

このように子供たちのことを真剣に考え，子供たちのためにと思って始めた事業も次々に失敗に終ることはどういうことなのだろうか。

「友よ。私が，いま，顧みて，果たして私は人間教授の本質に対して独自に何を貢献したかと問いますと――私は分るのです。即ち私はすべての認識の絶対的基礎として直観の承認の中に教授の最高至上の原理を確立し，すべての個々の学問の排除によって，学問それ自体の本質と人類の完成が，自然そのものによって規定されなければならない原型を発見しようと試みたことが。私には分るのです。即ち私はあらゆる教授の全体を三つの基礎手段に還元し，あらゆる教授の成果をこの三つの部分に於て確定した必然性にまで高め得る特殊な手段を探究したことが。

そして遂に私には分るのです。私はこれらの三つの基礎手段を相互に調和させ，それによって教授を単に多方面的に，或は三つの部分においてでなく，人間自然性とも一致させ人類の発展における自然の道行そのものに近づけたことが[32]。」

ここでペスタロッチの教育は直観の認識が絶対基礎であること。さらにその基礎手段―数・形・語―に還元しかつその相互の調和並びにその人間の本性との調和を企画したことが彼の教育研究の主要要素であることがわかる。

ペスタロッチはイヴェルドンの学校の教師をした時には文章も文字も正しく書けなかったし，それまでの30年間，本を一冊も読めなかったといわれているが，このような人がどうして154もの論文を書けたのであろうか。これはあくまでも誇張であって，さまざまな抜き書きによる文章等によってもわかるようにペスタロッチの特有の謙遜であって，真理の研究は文字や言語や概念に依るのではなく，あくまでも各自の体験に基づくものであることを強調したかったのだと思うのである。

ペスタロッチによれば，

「子供が子供を教えました。それは為すべきだ，と私が言ったことを，子供達は為し遂げようと試みました。そして，実現の方法をいろいろと自分達で探し出したのです。学習の初歩に於けるこの多方面に発展し行く自己活動性は，すべての真の教育，すべての陶冶的教育が，子供自身の内面から導かれ，子供自身の内に生まれなければならないという信念を勇気づけるに充分でした。苦

難の結実が私をここに導いたのです。私には協力者がありませんでしたので，比較的出来のいい子供を，能力の低い者の間に坐らせました。するとその子供は彼等を両腕でかかえ，自分に出来ることを彼等に言って聞かせ，また彼等は出来ないことを彼に真似て唱えました。彼等は親密な愛情をもって並び合って坐り，歓喜と同情が彼等の内心を元気づけ，彼等の相互に自覚した内面の生活は，この協力的な自己激励によってでなければ到底なされ得ないほどに，彼等の両方を進歩させたのです[63]。」

ここで見られるように学ぶということは自分が学んだことを周りの子供たちに教えながら，周りの子供たちはそれを真似し，一緒に試行錯誤を続けながら，あらゆるものを身につけていくのであると思う。子供たち自身は何かをしたいという内的欲求に満ちているのであるが，何をしたらよいかわからないという場合が多い。その時にちょっとした示唆を与えることが大切である。そのためには子供たちに対する充分な観察が必要であると思う。

ペスタロッチは『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』において人間は心情，知性，技術の三者を具備しその三者の調和によって完成した人間となるといっている。であるから教育はこの一人一人が持つ三者を調和させるようにとめざすものであると述べている。

小原はペスタロッチの教育を全人教養であるとして，次のようにとらえている。「いうまでもなく先生は全人教養を非常に重大視された。調和的陶冶を主張された。人間性能は体・知・徳の三要素より成る有機体であって，たえず発達するもの故，教育はこれらの諸能力を完全に発達せしめねばならぬとされた。殊に宗教陶冶を重要視された，当時の人間性能の一方面だけを偏重して片輪教育をいたく憂えて『綴方学校はある，書方学校はある。されど人間学校はない』と痛感して居られる。教育思想の内容として3H，即ち Head, Heart, Hand 頭と胸と手の三つの教育を必要された[64]。」

この三要素を発達させるためには労作（練習）が最も適しているといわれる。人間は自然の欲求としてあらゆる自己の能力を活かそうとするものであり，その衝動は強いものである。この人間の本性に従うことが人間を発展（成長）させるのであり，それがまた合自然的な教育にほかならないのである。

ペスタロッチは，学校は温かで自由な一大家庭であることが望ましいという。子供の場合，その子供たちが遊戯に熱中すればいつまでも遊ばせ，それは家庭生活を幸福にさせる要件である感情及び道徳を啓発させるとして大切に考えたのである。

III．.ペスタロッチと小原の類似点

1．妻たち（アンナと信）

アンナはチューリヒの街のペスタロッチの近所に住んでいて，父は実業家であり，文学芸術方面に高い教養と趣味を持っていて，彼女の家は集会場になっていた。アンナも芸術や学問に対する教養を身につけ，美しく洗練された女性であった。彼女の4人の弟の1人がボドマー教授のもとに集まる愛国者団に入っていたためブランチュリやペスタロッチとも親しかった。

まずペスタロッチとの婚約時代の手紙をみると，(1767年8月19日付)

「わたしの親しい友よ，わたしは，神の特別の思召しによる導きがなければ，とてもあなたにお近づきになれなかったでしょう。あなたの値打ち，あなたの美点，あなたの気高いお心を信じ切るまでは，わたしはあなたを愛することはしなかったのです。友よ。あなたはあらゆる試練に耐えていらっしゃいました。わたしは，わたしの気持に従い，わたしの気持を信頼してゆきたいと存じます。私の気持！それは純粋で，真実の力に根ざしているものです！すべての青年の中で最も善きわたし友よ！わたしは，あなたに永久に安心していただきたいと思うのです！おお，わが神，わが父よ！わたしにお力をおかし下さいませ！わたしは今，わたしの運命のあらゆる難に向って進むつもりでございます！　後略[65]」

信仰厚く純真な心の持ち主であったアンナはこのような堅い決心でペスタロッチのところに嫁いできて，ペスタロッチとのあらゆる苦難の中にあっても明朗さと神への信頼を失なわなかったのである。

ペスタロッチとの46年間の生活は，アンナが両親の家を出る時に彼女の母に言われた言葉「おまえはパンと水とで満足しなければならなくなるよ[66]。」の通りになってしまったのである。パンさえもない，言葉にいい尽せないほどの貧困生活，子供たちにパンを食べさせるために自分たちは水だけで過すという生活が続いたことも始終であった。このような生活が待っていることをアンナは予感していたのか婚約時代の手紙に次のようなのがある。

「もちろん私は女です。どんな不幸にも従います。たとえあらゆる困難がすっかり私の上に積み重なり，一度に私を攻めても大丈夫です。その中にあっても，比べものもない大きな愉快な瞬間が，私をすべての苦しみから，再び明るみへ引っぱり出してくれます。そして私が時に喜び，時に悲しみを感ずるのも，結局，神が私の心をいつも永遠に目覚めさせ，永劫の世界に私の心を結びつけて下さるために，賢明な摂理としてやっていて下さるのかと思えば，まことにその全知全能に心から私は感

謝いたします。苦しむことは私にとって善いことであるとは，いつもあなたが私におっしゃったお言葉であり，あなたにもまたそれを確証されていられたことなのでしょう[37]。」

これほどまでに神を信頼することができたアンナ，この人こそが人の人，ペスタロッチと小原が求めていた人，調和のとれた人ではないだろうか。

『ペスタロッチにふさわしき妻アンナ』を書いたザイファルト[38]はアンナを評して次のようにいっている。「彼女の謙虚な内気さは，いつも夫の心に大きな力を与えた。非常にせっぱつまった場合でも，いつも彼女は従順な忍耐と，静かな信心深い辛抱さとで，ペスタロッチの杖とも柱ともなった。

そしてイフェルドンの学校に侵入してきた紊乱と，争論との中にあって，彼女はいつもその和解調停につとめた。ペスタロッチの生活を通して，彼女は節度を保ちながら，力強い内助の実をあげたことは我々が忘れることのできないものである[39]。」

ここでもアンナの人となりが描かれているが，このようなすばらしい妻をもったペスタロッチはどんなに幸せな人だったろう。あらゆる困難の中にあって，その苦しさ，悩み，痛みをやわらげる寄り所。母鳥が小鳥をその羽で暖め，愛しむように，アンナはペスタロッチの安らぎの場であったのである。神がアンナを通してペスタロッチに働きかけ叱咤激励していたのではないだろうか。このようなアンナを妻にしたペスタロッチ，まさにペスタロッチのために生まれてきたようなアンナと生涯をともにすることができたことは，ペスタロッチが後世に名を残すことができたことに大きな役割を果たしていると思う。

小原もこのペスタロッチとアンナとの組合せについていう。

「また考えてみれば，果報者であった。もし先生の内助者として，共生者として，慰安者として，力づけ人として，その糟糠の妻アンナがなかったならば！実に先生の偉大を以てしても或は半ばを失ったかも知れない。無論，先生の妻としてはじめて，アンナもその精神的偉大さを発揮し得たにちがいないが，先生もたしかにアンナを待ってはじめてその偉大さを発揮されたと思う[40]。」

前述したように風采もあがらず，地位もなく，富もなく，何の取り柄もなさそうに見受けられるペスタロッチをかくまで愛し，ともに苦難に耐えたアンナの精神的な偉大さは神の愛にも等しく思われる。アンナのこの愛に満ちた心がペスタロッチを溢れるばかりの愛の人，愛の実践家としたのではないだろうか。

一方小原もアンナに劣らずすばらしい妻を与えられた。小原信（1895—1977）は牧師の娘に生まれ，ミッションスクールに学び，教育者としての道を歩んでいた。広島の山中高等女学校の教諭として英語の教育にあたると同時に市内の広島教会の日曜学校でオルガニストとして奉仕をしていて，そこで小原と知り会った。

信は小原の背後にいつも寄り添うが如く，ひっそりと控え目でありながらも，強さをも兼ね備えていた。ある時には「何でもやりましょう。できなくても計画をしただけでも良いではありませんか。誰かが，その計画を見て次の時代に継続させてくれる人がいるでしょうから[41]。」と小柄な体に大きな心の持ち主だった。ペスタロッチのアンナと同様に信仰厚く，控え目でありながら，時として決断力と実行力に優れていたのである。だからこそペスタロッチと同じような小原の七転び八起きの人生，無一文からの玉川学園の創設，経営，教育を全うすることができたのであると思う。

小原の玉川の丘の開拓はまさにペスタロッチのイヴェルドンであったのである。

「……丘の上にバラック校舎と点在する塾舎，そこには自給自足，自学自修の精神に生きる新芽のような生命の開拓の困難と闘いながら，すくすくのびてゆく，土木工事はおろか電気工事や印刷，養鶏，養蚕，養魚等に至るまで皆生徒等の実習であり勤労であり，また学資を得る方便でもある——中略——つまり，寺子屋の精神が近代的な様式をかりてここに再興されたのだ。現代教育のもたらす打算的な小心と焦慮とから隔絶されて，なつかしい土の香の明るい日光との大自然に抱かれ潑剌たる気魄と若き日の奔放な夢とをつつんで育ちゆく児等はまさに祝福されるべきであろう[42]。」このように祝福されて始められた学園であったが，幾度となく襲いかかる危機にも信をはじめとするよき協力者に恵まれて挫折することなく立ち上ることができたのである。その中にあって信は，例えば，玉川学園が危機存亡の時となった昭和17年(1942)[43]，小原が全ての校長を辞任した時，その後の空襲と食料不足と工場勤労動員の時にも小原を助け再建に邁進したのである。さらに昭和20年(1945)終戦後のきびしい，貧しい玉川学園を支え，昭和22年(1947)2月玉川大学設置認下の年には理事長をも引受け，小原が大学長となるまでの昭和25年(1950)から昭和27(1952)年1月8日まで，信は大学長をも兼ねていたのである。その後も信は昭和51年(1976)3月まで女子塾塾監として細部にわたる女子教育の指導を続けた。

信はキリスト者としての一生涯を小原につかえる人として謙虚に生きていたようであるが，小原の教育理論を身をもって示した人であると思うのである。その他に与

える影響力は小原以上のものがあったのではないだろうか。これはまさしくペスタロッチとアンナにしても同様であると思う。

2. 愛の教育（全人教育）

小原の願いは一切の主義と主張を撤廃して，ただ『人』に帰ること，『人の教育』である。ペスタロッチの頭と心と体の調和のある人の教育の実現のために努力することである。子供の頃から一人の人間として一方に偏ることなく，万遍無く調和的に発達(成長)させることである。

1787年4月ペスタロッチはデンマークのシュンスター宛に書いている。「いまわたしは，人間に関し，また人の教育 ihre (der Menschen) Führng に関して研究するために，資料を集め，そしてこの究極目的のために読書するという計画にかかっていますが，それはこの年齢のわたしにとっては一つの新しい仕事です[44]。」

小原は最後まで「人になれ，人になれ」との言葉をくり返し，コスモスの花のような調和のとれた人になるようにと子供たちを導くことをめざしていた。子供に対する心の豊かさ，暖かさ，愛に満ち溢れる小原のまなざしは，ペスタロッチと共通している。その愛の教育についてペスタロッチは次のように述べている。

「私は私の事業によって，人間の本性の低級な素質と，その感性的能力の限られた陶冶を求めようとは決して思っていない。否，おゝ，神よ，私は私の行為によって，最も高きもの，最も尊きものへの，人間の本性の高揚を求めているのである—私は愛による人間の本性の高揚を求めているのであり，且つ聖なる愛の力においてのみ，人間の本性に内在する神性と永遠性とへの人類の陶冶の基礎を認めるのである。私は，私の本性に内在する精神と技巧と見解のすべての素質を，心情の手段として，また愛への神的な高揚の手段としてのみ見るものである。我々人類の人間性への陶冶の可能性を，私は人間の高揚の内にのみ認める。愛こそは我々の本性を，人間性へ陶冶する唯一永遠の基礎である[45]。」

愛について最も理解しやすいたとえは，母の愛である。小原もペスタロッチも母親のあり方を重視しているところに共通点を見い出す。母の愛を通して神の愛を理解するのである。小原もペスタロッチもそれぞれすばらしい母を持ち，母の愛に育くまれ母を尊敬して成長した。

母親，どんなに貧しくどんなに無知であり，経験の乏しい若い母親であっても，わが子の知的発達を援助することはできないというようなことは決してない。母親は，自分の幼児がまだ知らないいわば日常生活に起こる無限に広がる事柄を，自分が知っていることを自覚しているものである。そこには子供を愛する愛に満たされているからである。

人間を人間的な人間にすることは母と子との応答，対話から愛が生じてそこから発展していく。この母子の対話は神への対話，神との関係を生み出す。ペスタロッチが『隠者の夕暮』の中でいっている父心，子心と同じ関係である。すなわち「神はその一人子を賜わったほどに，この世を愛して下さった[46]」その愛であり，子心とはその神の愛をすなおに受け，その愛に従う者となることである。ペスタロッチの「おのれを捨ててすべて人のために！」という生きざまである。これが愛である。小原もこのペスタロッチに倣い，実践したのである。

「己を捨てることは実に全く真の自分を得る所以である。人の為でなくて，実は自分を生かす所以である。教えさして貰っているのである。尽さして貰っているのである。生かさして貰っているのである[47]。」

小原とペスタロッチが求めた調和のとれた人間は，私たちキリスト者にとっても同じようにめざすべき人間である。それは調和のとれた人，理想とする人，それはイエス・キリストである。神が私たち人間を愛されたが故に神の一人子であるイエス・キリストを私たちの模範とすべくこの世におつかわしになったのである。私たちはイエス・キリストの生涯を見倣い，少しでも調和のとれた人間，愛することのできる人間になることが必要なのである。愛することのできる人間に子供たちを育てることそれが教育の基本であると思う。

ペスタロッチと小原，子供たちのためにとその生涯を捧げた二人の生涯を通して私たちは教育の基本，教育に対する姿勢を学ぶのである。

引用文献・参考文献

ペスタロッチ著　福島正雄訳『隠者の夕暮，略伝，言行片々，希望，新婚生活日記，育児日記』
玉川大学出版部　昭和44年版
ペスタロッチ著　福島・玖村・細谷・四本訳『スイス週報，寓話選，シュタンツだより，婚約時代の手紙』
玉川大学出版部　昭和44年版
ペスタロッチ著　鯵坂二夫・四本忠俊訳『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか，学園講演集』
玉川大学出版部　昭和44年版
ペスタロッチ著　田尾一一訳『リーンハルトとゲルトルート（酔人の妻）』玉川大学出版部　昭和44年版
ペスタロッチ著　田尾一一・四本忠俊訳『立法と嬰児殺し，白鳥の歌』　玉川大学出版部　昭和44年版
ペスタロッチ著　虎竹正之訳『探究』
玉川大学出版部　昭和44年版
ペスタロッチ著　長田新編集校閲『ペスタロッチ全集第一巻』平凡社　昭和34年版
ペスタロッチ著　田口仁久訳『幼児教育の書簡』
玉川大学出版部　1983年版

ド・ガン原著　大日本学術教会訳修『ペスタロッチの生涯と其の事業』　日本書院　昭和5年版
長田新著『ペスタロッチー教育学』　岩波書店　昭和9年版
坂東藤太郎著『ペスタロッチーの道徳・宗教教育の研究』　協同出版株式会社　昭和42年版
諸星洪著『玉川のおやじ』玉川大学出版部　昭和42年版
福島政雄著『ペスタロッチ　隠者の夕暮』　福村出版株式会社　1978年版
福島政雄著『ペスタロッチ』福村出版株式会社　1982年版
小原國芳著　小原國芳全集3『ペスタロッチを慕いて』　玉川大学出版部　昭和54年版
ザィファルト著市村秀志訳補『ペスタロッチにふさわしき妻アンナ』　玉川大学出版部　昭和55年版
稲富栄次郎著『ペスタロッチの生涯と思想』　福村出版株式会社　1982年版
玖村敏雄著『ペスタロッチの生涯』　玉川大学出版部　昭和58年版
雑誌　小原國芳監修『全人教育』No.339　玉川大学出版部　昭和52年7月号

注

(1) 小原國芳著『ペスタロッチを慕いて』玉川大学出版部　昭和55年版　15頁。
(2) (1)と同じ　16頁。
(3) 玖村敏雄著『ペスタロッチの生涯』玉川大学出版部　昭和58年版　17頁。
(4) (2)と同じ　38頁。
(5) ド・ガン Roger de Guimps
"Histoire de Pastalozzi de sa pensée et de son oeuvre. 1874"
『ペスタロッチの生涯と其の事業』日東書院　昭和5年版　30頁。
(6) ペスタロッチ著　四本忠俊訳『婚約時代の手紙』玉川大学出版部　昭和44年版　284～285頁。
(7) Bluntschly, (1742—1747) ペスタロッチとは愛国者団 (Patrioten) (ボドマー教授の指導のもとにつくられた政治結社) 以来の友人である。
(8) イザーク・イゼリン (Isaak Iselin, 1728—1782) ペスタロッチの事業について最もよく理解し，同情と後援を惜しまなかった人である。(3)と同じ　57頁
(9) (3)に同じ　273頁 (ペスタロッチ著作年表による)
(10) エリザベート・ネーフ (Elizabeth Naef) ノイホーフの危急にあってペスタロッチが困っている時に奉仕を申し出，ペスタローチの一子ヤコブを育て，ペスタロッチの恩人である。ゲルトルートのモデルでもある。
(11) ペスタロッチ著　細谷浩一訳『シュタンツだより(13)』玉川大学出版部　昭和44年　169頁。
(12) (11)と同じ　169頁。
(13) ペスタロッチ著　鯵坂二夫訳『ゲルトルートは如何にしてその子等を教うるか』玉川大学出版部　昭和44年版　21頁。
(14) ベルン市の東北20kmばかりの地，エメム川に沿う小都会で人口8,000，古城が丘の上にあった。
(15) フェレンベルグ (Fellenberg, 1771—1844) ペスタロッチとはノイホーフ時代からの知り合い。ベルンの貴族の息子，28歳でペスタロッチに刺激されて Hofwy I に自分の農業学校を創設，周密な計画有能な協力者によって事業は成功していた。(3)と同じ　163頁。
(16) Yverdon フランス名イフェルテン。ヌシャテル湖 (Lac de Neuchâtel) の南湖畔に位置した静かな町である。
(17) ペスタロッチ著　四本忠俊訳『学園講演集』玉川大学出版部　昭和44年版　403頁。1811年元旦の講演。
(18) Joseph Schmitt はじめはペスタロッチの算術教育法を受持っていた。
(19) Jean-Jacqes Rousseau, 1712—1778 スイス国ジュネーブの市民。教育小説『エミール』(1762) は近代教育思想に新紀元をもたらすものである。
(20) (13)と同じ　10頁。
(21) (5)と同じ　72頁。
(22) (13)と同じ　10頁。
(23) ペスタロッチの生涯の著書である　『寓話選』を訳している。
(24) (3)と同じ　7頁。
(25) 1897年福岡県出身，1929年東北大学哲学科卒業，文学博士。主著に『教育の本質』『教育目的論』その他がある。
(26) 稲村富次郎著『ペスタロッチの生涯と思想』福村出版株式会社　1982年版　18頁。
(27) (1)と同じ　89頁。
(28) ペスタロッチ著　福島政雄訳『スイス週報』玉川大学出版部　昭和44年版　3頁。
(29) (28)と同じ　20頁。
(30) (28)と同じ　22頁。
(31) (28)と同じ　26頁。
(32) (13)と同じ　214頁。
(33) (13)と同じ　23頁。
(34) (1)と同じ　92頁。
(35) ペスタロッチとアンナ・シュルテス著　四本忠俊訳『婚約時代の手紙』玉川大学出版部　昭和44年版　309頁。
(36) ザイファルト著　市村秀志訳補『ペスタロッチにふさわしき妻アンナ』玉川大学出版部　昭和55年版　66頁。
(37) (36)と同じ　60頁。
(38) L. W. Seyffarth : Frau Pestalozzi Anna geb Sehulthess, 1895
(39) (36)と同じ　19頁。
(40) (1)と同じ　74頁。
(41) 玉川同窓会々報 No.24 (昭和40年12月)「小原のおば様を囲んで」。
(42) 東京日日新聞　昭昭4年 (1929) 4月24日日付「徳富先生，学園参観記」
(43) 昭和17年 (1942年) 興亜工大事件のため懲役3年執行猶予2年となったこと。これにより昭和19年興亜工業大学監事ならびに学監を辞任。
(44) ペスタロッチ著　虎竹正之訳『探究』解説　玉川大学出版部　昭和44年版　291頁。
(45) (17)と同じ　333頁。1809年元旦の講演。
(46) ヨハネによる福音書3：16。
(47) (1)に同じ　55頁。